

有機農業の共同実験

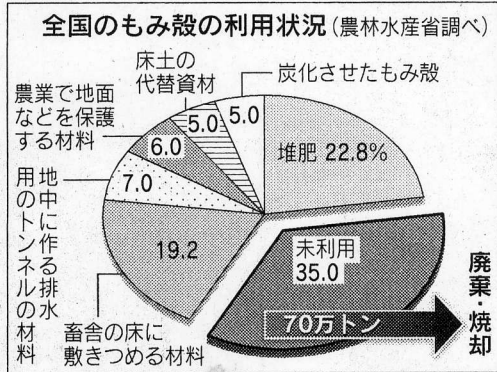
茨城大学農学部 原弘道准教授と出光興産などは、茨城県阿見町で有機農業の共同実験を始めた。出光の微生物を使った農作物に害虫や病気を付きにくくする技術と同大などの発酵もみ殻の堆肥(たしい)を組み合わせる。有機農業でも収穫量が多く見栄えのよい野菜を作ることを目指している。

茨城大と出光興産



もみ殻堆肥を使うと作物の生育がよくなる(右の列)。左は通常の堆肥を使用(茨城県阿見町)

微生物・もみ殻で防虫 収穫量向上狙う



実験に使う農作物はシヤガイモ・サツマイモ・枝豆の三種類。種付けから収穫までを地元の生産者に委託する。期間は三月末から十一月までの間、約二百五十平方メートルの農地を地権者から借り受けた。発酵もみ殻技術は、茨城大とバイオベンチャーの「つくばバイオマスも

みから研究会」(藤田哲史会長)などが開発。通常、もみ殻を堆肥化するのに三年近くかかるが、同研究会などは約一カ月で分解発酵できる技術を確立した。このもみ殻堆肥を使うと、これまで分解しにくかったリグニンなどの植物繊維が糖分に分解され、微生物が繁殖しやすい土壌となる。出光は現在、微生物を使った防虫・防疫効果を生む技術を多数持つ。発酵もみ殻と組み合わせることで、微生物の効果が向上することが分かっており、実際の農場で栽培実験することでより効果的な利用方法を探る。茨城大の原准教授は「まだデータ収集の段階だが、有機農業の生産性向上につながるはず」と話す。今後、発酵もみ殻を使った自治体ぐるみでの実証実験を目指している。有機農業は大量・安定生産が難しいうえ、見栄

えが悪い農作物が出来やすい。害虫や疫病にも弱かったが、微生物を使った技術で克服できる。化学肥料や農薬、遺伝子組み換え技術を使わない農産物の生産・販売を後押しする有機農業推進法の成立など、環境に優しい農業に取り組み事業者を支援する国や自治体の支援体制が進む。循環型の有機農業モデルが固まれば、自治体単位での取り組みも活発化しそうだ。発酵もみ殻は、すでに業務用の生ゴミ処理機に活用されており、つくば市内の飲食店などで設置されている。